

新潟産業大学報

青海波



第11号

発行日 平成11年4月5日
発行集 新潟産業大学
編集 新潟産業大学

新潟県柏崎市軽井川4730番地
TEL 0257-24-6655
FAX 0257-22-1300

生涯学習センターの開設にあたって

学長 荊木久彌



新年度から
本学に「生涯
学習センタ

ー」が設置されることになった。本学ではこれまで、生涯学習については、社会全体の学習ニーズの高まりに応じて、開かれた大学を実現すべく、意欲的な取り組みを続けてきた。今後この姿勢を堅持し、大学に期待される役割の吟味と可能性の範囲を探りながら、より一層、積極的に生涯学習活動の推進に向けて努力したいと考えている。

本学の場合、公開講座に重点をおいた取り組みであったが、生涯学習センターのような専門の実施機関を設けなければ出来ないものでないことは経験済みである。然し、実施体制が整備されていけば、なお一層、充実した事業の展開が期待できることも確かである。生涯学習に深い関わりを持ちながら進むことを、本学の今後の姿勢としていくなら、客観的な諸情勢にも配慮して、今がセンター問題検討の好機でもあろうかと考え、全学教授会の了承を得た《生涯学

習センター設置構想検討会》に諮問を發したところ、入念周密な検討の結果が答申された。1月の全学教授会でその概要を報告し、検討会の「センターの設置が望まれる」との提言を尊重した判断を示して、センターの発足に向けた教授会の合意を得させていただいた。

大学が関わる生涯学習については、前にこの学報によせた短文でも触れたように、大学開放と呼ばれる関わり方のすべてを含むほど広い捉え方もあるが、本学では、あれもこれもと手を出すのではなく、センター発足後も当面は、これまで試みて来た公開講座や講演会のようなものを中心に、一段と踏み込んで取り組みを強化したいと考えている。

生涯学習センター設置の狙いは、色々考えられ、先の答申でも触れてあるが、生涯学習プログラムの開発・提案・実践を通して、地域社会への貢献を図ると同時に、地域との連携・交流を深めることを主眼としながら、併せて大学の魅力ある個性づくりにも役立

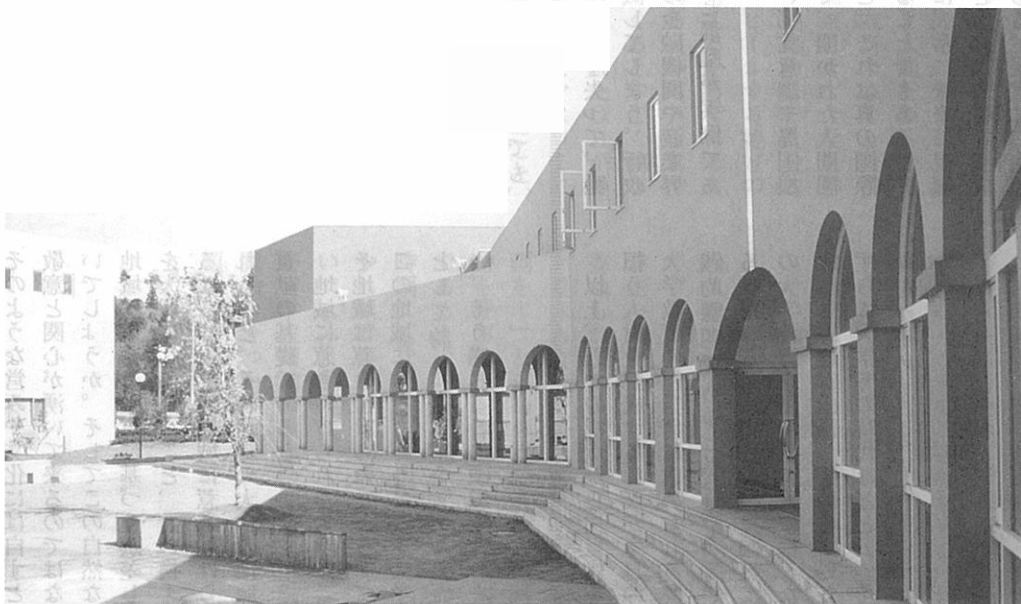
てたいとの願いも込められたものである。

この分野では、すでに大規模な事業展開を実施している先進諸大学もあるが、そこから学べるものは学ぶとしても、本学は本学の身の丈に合った、本学にふさわしい、本学ならではの

という生涯学習が実践できれば理想ではないかと思う。スタート初年度は、12年度以降に向けた準備と体制の基礎づくりに努めることが求められるであろう。短大を除き、県内大学第1号の生涯学習センターとして誕生しただけに、寄せられる期待も決して小さくはないと思われるが、それが、情熱をもって地道な活動をしっかりと行け

るべきであろう。短大を除き、県内大学第1号の生涯学習センターとして誕生しただけに、寄せられる期待も決して小さくはないと思われるが、それが、情熱をもって地道な活動をしっかりと行け

ば、それが実力の蓄積となり、センターの優れた評価に結びつくはずである。今や生涯学習社会には後退はなく、前進と拡充があるだけである。センターが立派に機能することを期待してやまぬものである。



大学の発展基盤について

経済学部長 竹内明眸



産業社会は常に変動を余儀なくされる

ものです。教育産業、とりわけ大学として例外ではありません。今や大学市場は供給過剰の時代に入りました。そして過去、幾多の産業においてそうであったように、大

学の場合も産業全体の役割が時代と共に変わるのに伴い、その内容や性質を社会情勢に合った形で能動的に自ら変えていく柔軟さが求められています。

本学は、人材育成と環日本海圏の文化・経済の研究の世界的拠点たらんことを目指して10年間余の

二十一世紀に向けての

大学教育の課題

人文学部長 加藤 榮 一



あと十ヶ月 ならずで二十世紀最後の年

を迎えることになるが、この世紀末の十年間、一九九〇年代をふりかえってみると、ベルリンの壁の崩壊に象徴される東西冷戦構造の解消や湾岸戦争にはじまって、今年の欧州通貨統合にいたるまで、このかん、従来の世界のシステムを揺るがすような、さまざまな変動や事件が世界の各地で継起した。それは激動の十年間と言って

もよいだろう。そして私たちの住んでいる日本でも、この激動の過程で、私たちの日常生活にも深刻な影響をおよぼすような幾多の事件や社会的現象が起こった。いわゆるバブルの崩壊に端を発する一連の経済的混乱や、さまざまな社会的スキャンダルなどは、その一例に過ぎないが、このような状況に直面して、我われは日本の社会の在り方について根本から考え直さねばならないが、同時に、この激動の時代にあつて、我われ

歴史を歩んで参りました。このビジョンは本学ある限り保持されるものでありましょう。しかしながら同時に、少子化という一国全体をとりまく動向と大学の過剰供給という環境の中、各大学は存立の条件というものを考察しなければならぬ状況に置かれており、そのことは本学として例外ではあり得ません。

では、大学として何をなすべきか。どう変わるべきか。私はこれからの大学の存続と発展は、立地する地域からの支持なくしてはあ

は、世界中の人びとから日本の真価を問われているのだということを感じ、二十一世紀の世界に向けての日本の針路を定めねばならない。

日本が全世界の人びとと、真に平和で友好的な、そしてたがいに対等の立場で国際社会に伍していくためには、日本人の意識構造を次の三つの視点から、抜本的に改革する必要があるだろう。

すなわち、第一の視点は、人と人との関係を縦の関係ではなく、横の關係に基軸をすえて社会を構築し、行動していくことである。それは、日本の社会の徹底的な民主化を実現していくことを意味する。構成員相互の民主的意志決定の機構を欠いた組織は危機に直面

り得ないものと考えます。大学の立場から言い換えますならば、地域貢献なくして大学が存続し発展していくことは出来ないと考えます。では、大学の地域貢献とはどのようなものなのか。それは次のような自然体なものでないかと考えています。すなわち、大学が立地する地域には、今も昔も人々が住み、経済活動を営み、長い歴史と文化があり、そしてその地域が共有する意識があります。人文・社会科学を志す者であるならば、その専攻や分野を問わず誰でも、

第二は、狭い郷党意識や島国根性から脱却して、開かれた人間関係をつくること。これは真の国際交流を実現することでもある。

そして第三に、常に未来に視線をすえた前向き志向の人材を養成すること、である。現代は、人類が新しい世界、新しい歴史を切り拓いていく大変革の時代である。既成の慣例や常識では対処し得ない新たな事態や局面が急速に展開していく歴史の潮流を適確に見通してこれに対応し得る知性と資質を備えた人材が要求されよう。

そのような営みや文化には自ずと敬意と関心が湧いて来るのではないのでしょうか。そしてこの自然な地域に対する敬意に基づく眼差しを大切にしていくこと、言い換えれば大学が地域に惹き付けられるならば大学が地域に惹き付けられること。それが真の大学の地域貢献の基礎であると思います。

地域に惹き付けられた大学にこそ地域は惹き付けられる。そしてこの地域にあるということを大学として誇りに思う大学でありたい。そう感じるこの頃です。

以上、三つの視点から次世代を担う人材を養成することが今日の大学教育の担当者に求められる実践的課題であると私は考えている。だから、二十一世紀に向けての大学教育を担う我われには、なすべき課題が山積している。いたずらに大学冬の時代などと云つて身がかがめている訳にはいかない。



改革の波

教務部長 沼岡 努

およそ10年前に全国の大学が大学審議会の答申を受け、教育改革に着手したことは周知のことと思います。文部省報告には平成8年度までに全国の475大学(約93%)がすでにカリキュラム改革を実施したとあります。本学でも目下、旧カリキュラムから新カリキュラムへ移行段階にあります。

全国の大学ではほぼ実施済みと言われているカリキュラム改革及びその周辺の教育改革の波について、今後の方向性の観点から少し述べてみようと思います。

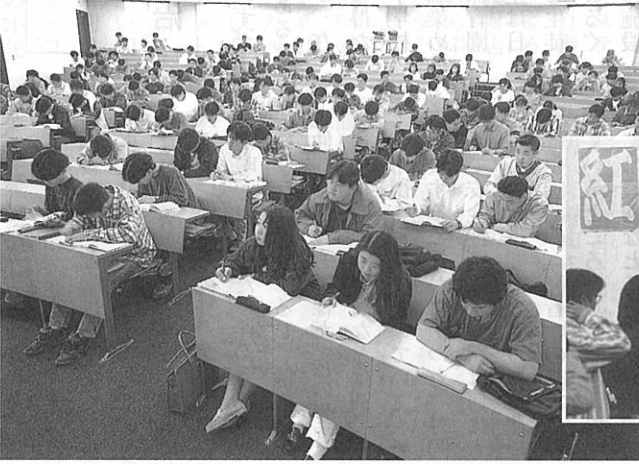
「改革の波」は、その規模とスピードにおいて私共の予想をはるかに上回り、あたかも各大学の自己点検・評価の進捗状況に飽き足らないかのように、大学審議会は昨年10月、更に大きく一歩踏み込んだ見解を表明しました。それは、端的には、大学が自己点検・評価の結果を社会に公表すること、自己点検・評価が公正かつ客観的に行われるよう学外の第三者による検証を責務として位置付けること、の二点です。

生涯学習の地域的拠点としての大学の責任という問題などとも関連しますが、一般授業に関しては、社会人の積極的受け入れ、それを踏まえた「土曜開講」、授業内容・評価の公表、等々が挙げられます。

二点目の学外第三者機関による検証は、国立大学を対象とした提言で、その成果を各大学に対する予算配分と連動させる意向のようです。私学については明確な方向性を提言しておりません。このことは、裏を返せば、「私学は自己責任の下で自助努力しなさい。文部省は経営には一切関与しません。」ということを意味します。従って、大学審議会の答申は一見国立大学に対して手厳しいもののようにですが、努力すれば救われる道がまだ国立には残っているとも言えます。

ここ数年来の「改革の波」の方向性を考える時、どうしても教育の「アメリカ化」の思いを払拭することが出

来ません。その是非はどうあれ、今後全国の大半の大学が形態、実質両面においてアメリカ型教育を促進させることになるように思えてなりません。本学もこのことを念頭に入れ、いかなる個性輝く大学を目指すのか、その方向性を選択し、決断を下すべき日がすぐそこまで迫っております。



紅葉祭に全学生の力を集めよう!

学生部長 廣川 俊 男

秋には、本学の伝統行事「紅葉祭」が開催されるが、私はこのイベントに、いつも密かな期待を抱いている。なぜなら、私がかもとも「祭り」大好き人間だからであるが、しかし、本当のもっと大事な理由は、学園祭こそ、大学と学生のエネルギーを集中し、社会にその存在をアピールする絶好の機会の一つと考えるからである。

「母校に関わる良いニュースや評判が伝わってくるとすごく嬉しい……」と話してくれたOBがいたが、11月が近付くとマスコミにも注目され、在学生は勿論のこと、父母や周辺地域の方々がわくわくしながら待ち望む学園祭を軽井川キャンパス内に実現できるなら、多くのOB諸君はもともと胸を張ってくれ、きつと、恋人や家族を連れて訪ねてきてくれるに違いない。

新しい視点で経済学を捉え、国際交流を謳う新潟産業大学は、全国各地と海外からの学生が集う個性溢れる大学である筈だが、残念ながら私には、それが十分周知されているとは思えない。しかし、

もし、私たちが、とことん賑やかで、しかも、大学らしいアカデミックな内容も含み、学生らしい斬新な視点からの問題提起をなされるような「紅葉祭」を、創意工夫を尽くして準備するならば、認知は確実に広がることだろう。

その鍵は、寝食を忘れ奮闘してくれる学友会や学生行事実行委員の人達だけでなく、本学構成員全て、とりわけ2000名を超える学生一人一人と、残された時間に委ねられている。

夏休み直前に、「ゼミからも企画を！」と求められても他人の感動を呼ぶものを創りだすのは困難であろう。新学期開始早々のこの時期に、秋の学園祭に触れるとは、少し気が早いと思われるかもしれませんが、学生諸君の秋への期待と準備開始のきっかけになってほしいと願うのである。

中国の黒龍江大学 交換教員(留学)を終えて

経済学部教授 岡 本 光 治

大学の国際交流協定校(哈爾濱市の黒大)へ、一昨年の秋から昨年夏までのほぼ一年間、家族同伴(女房、小3の娘、小1の息子)で赴任してきた。一年間の長期にわたる生活は言葉や食生活を始めてよい。最初の相当苦労したと言っても全寮制で学生も教職員もたいていキャンパス内に住み、日本、韓国、ロシアなどからきた大勢の留学生・研究者もここに住む。大学敷地内はあたかも「特別居住区」のようだが、それにしてもどんな苦労があったか。

留学生会館内の生活では頻繁におこる停電や断水に結構悩まされた。停電は蠟燭の準備でもしておけばさほどの支障はなかったが、断水のほうは調理、洗濯、シャワーにそれに水洗トイレの使用不能に追い込まれて難儀した。最大連続3日間というのも体験した。中国東北の中華料理は「脂っぽく、塩辛い」のが特徴で、日本人にはかなり厳しい。長期に及ぶ留学生仲間が北京に旅行し、そこで見つけた日本料理店で「カツどん」を注

文、一口食べたところで思わずポロリと涙が出たという話がある。これなど帰国後は笑い話だが、在留中は真に迫って同情を禁じ得ない話だ。子供二人は、現地小学校に編入させたが、本質的に馴染めなかった。運動場は日本の保育園並で遊ぶところがなく、先生は日本ほど優しくない。ふざける生徒はブン殴られ、顔に痣がのこるぐらい平気の世界だ。トイレの施設が貧弱で開けっ広げ、相当困ったようだ。厳冬期(12、2月)は未体験の寒気との闘いだ。マイナス16℃以下ぐらいになると、眼鏡の金属枠やレンズが異常に冷えて顔を締めつけて来るように感じる。鼻毛も凍る。この時期の徒歩による買物が堪えた。最後に最も困ったのが円レートの下落。中国人民元は米ドルにリンクしているのだ、円安は現地では相当な手取り減。日本からの送金コストも異常に高い。結局これが原因で後2つほど未練たつぷりに視察旅行をあきらめ早々に帰国した。しかし人間の運なんてものは分らないものだ。帰国した途端に現地は大洪

水、我家族は冷や汗をかいた。こうした苦労はあったものの、帰国後、ずっと胸に迫ってくる中国東北のすばらしい点は北京・上海などの大都会と違い、地域の人々がいかにも純朴、親密で実心が暖かいことだ。住んでみると実にリラックスするし、他の留学生仲間との意見も同様だ。夜の世界、交通ルールの未整備などは別にして、市街を家族で歩いていても妙に緊張することがなかった。外国生活で安全性確保の問題は何にもまして大変重要だ。さらに東北地方は中国語の「発音」の基本になっているところから、語学研修などには最適どころだ。一年間の体験を今思い起こしてみると、その印象は市場経済の制度移行に伴う社会の「模索と混乱」が目についたが、一方で様々な庶民生活に見られる「驚きや衝撃そして感動」を十分味わった日々だった。



黒龍江大学大学院での講義風景

中国短期留学について

人文学部四年 佐 山 泰 央

「苦労は買ってでもしろ」とはよく言うが、中国短期留学は新潟産業大学に入学したのなら中国語を専攻していなくても是非、参加してほしい機会である。

私は留学した当時はバスに乗るにしろ、品物を二つ買うにしろ、あらゆる生活の営みの中で「苦労」という言葉が後について来た。その「苦労」は身体を疲労させ、精神をも疲労させたが、なぜか心は不思議と心地よかった。それは恐らくは達成感と、充実感から来るものであろう。中国という、日本とは大きく異なった生活習慣を持つ国で、なんとか通じるような片言の中国語を用い、日本での常識が悉く通用しないながらもやりとりし、やっと一つのことを成し遂げたとき(例えば買い物など)まさにそれを感じるのである。これは決して大袈裟に言っているのではなく、日本という国でこれといった苦労をする事もなく、ただ平凡に毎日を過ごしてきた自分にとっては中国での留学生活は、あまりにも刺激的なものであった。そのため私は刺激を求め、敢えて毎

日「苦労」してきた。苦労した分だけ人は何かしら成長するものである。私もその甲斐あつてか、短期留学が終了したときには、大きな達成感と充実感から自信を持って成長したと断言できた。

今回の短期留学で語学力はもろんのこと、日本ではなかなか得ることのできない経験を手にした。この経験は今後、必ず自分にとってすばらしいものになるだろう。私はこの留学という機会を得ることができて本当に良かった。



天安門広場にて

卒業式

経済学部332名

人文学部148名が

社会へはばたく

平成11年3月19日(金)午前10時から柏崎市市民会館大ホールにて第8回卒業式が盛大に挙行された。今回卒業証書を授与されたのは経済学部332名、人文学部148名であった。式は卒業証書が卒

紅葉祭を終えて

経済学部四年 榎 俊介

今回、紅葉祭は11回目を迎えました。今年は、自分達の色―「新しいこと」―を前面に押し出そうということをコンセプトに掲げて取り組んで来ました。この目指すところは「斬新な裏切り」ということで、すなわち定番化した学園祭に転機を与えようということでした。

さて、前置きはいいとして、今年の学園祭は周囲にはどう映ったのでしょうか。結論から言ってみれば、恐らく、今までに比べてバラバラな印象を与えたのではないかと思います。というのも客観的に見て、天候も災いしましたが、例年より「ぶっつけ本番」的な面が多く、「完成形」とは程遠い内容に思えたからです。

細かな内容を覗いてみると、ま

業生代表に授与されたのち、学長式辞・来賓祝詞と厳肅な雰囲気の中で進行した。式終了後経済学部は各ゼミナール指導教員、人文学部は卒業論文指導教員から個人個人に卒業証書が授与された。各方面から卒業生の活躍が期待されているところである。

会場を移して恒例の謝恩パーティーが卒業生で組織する卒業委員会主催で開催され、卒業生は、恩師や友人と在学中の思い出に花を

ず今までの大きな違いは、開催期間が4日間ということでした。実際、これだけでも今回の学園祭に意味付けができたわけですが、

内容が薄れてしまったのでは意味がありません。そこでイベントにも新たな要素を加え、学生にステージに上がってもらうことを目指しました。それが軽音部による「ステージ公演」であり「模擬店PR」でした。しかし、これらのイベントも初めての試みということもあり、一口に「成功」とは言えないものでした。また、恒例のフリーマーケットでは約30店の出店があり、例年通りの賑わいだったといっても良いでしょう。しかし実際は、市のフリーマーケットと開催日が重なっていたことなど計画の杜撰であったことを思い知らされました。そしてさらに初日のメインであった「プロペラ・コンサート」も、宣伝・PRの不足

喚かせ、社会人としての旅立ちの前に、決意を新たにしていた。

●学長賞

板垣 裕美さん(経済学部)
大島 理恵さん(人文学部)

●文化・スポーツ功労賞

加藤 祐介君(卓球部)
八子 幸雅君
(バレーボール部)

――平成10年度各賞受賞者――

●国際交流功労賞
史 東岳君
相浦 豊子さん

と遅れを悔やむ結果に終わっています。こうして振り返ってみると、反省すべき点ばかりが目についてしましますが、そこは「今回が新しい始まり」です。参加してくれた方には大変申し訳ないのですが、最初から完成された形など望んではいけません。今回の失敗を前向きに捉え、この流れを継承してくれ

るのであろう将来に期待することによって結果が見出したいのです。とにかく結果がどうのというより、4日間皆で個性をぶつけ合い、精一杯がんばったことに誇りを持ちたいと思います。

最後に、学園祭に花を添えつけてくれた、模擬店、他団体の方々。学園祭に足を運んでくれた一般の方々。そして4日間、ひとつの目的に体当たりし続けてくれた素晴らしい仲間たちに感謝したいと思います。

学びはチャンス

附属研究所事務室 押見操子

生涯学習の推進がいろいろなところで図られている。ユネスコは一九九七年七月にハンブルグで第五回国際成人教育会議を開催。一三〇カ国以上から代表が参加し成人の学習について行動計画までもが練られた。

一方、「勉強なんてもうこりこり、頼まれたってしたくない。」と新潟産業大学の公開講座へのおさそいに返答される方もある。「でももし気が変わったらいっつも来てください。」と私共は答え

る。大学は、決して敷居の高いところではないのだ。

そんなとき生涯学習分野の一端を担いながら、学びとはなんだろうと思う。自分から講座に参加することは、主体的に学ぶことである。それは、新潟産業大学の開学の精神でもある。大学の講義と生涯学習は、主体的に自発的に学習するという点において、あるいはそんなにかげはなれたものではないのかもしれない。また、学ぶことによって日々が新しく生まれ変わるチャンスもあるだろう。チャンスは多い方がいい。どうぞ、ご一緒に。

医務室事情

医務室 中村英子

一日の終わりにふと処置名簿をみると、利用者が多い時で12〜15人、平均すると10人程になっている。この人数は症状を訴え、処置をしたもののみであるので、それ以外も含めると20人以上になる。最近このようなことはめずらしくない。

医務室を利用する学生がそんなにいるの？と疑問に思うかもしれないが、一人暮らしによる食生活の乱れや不規則な生活などから、健康状態をくずす学生が多いのが現状である。医務室は一人勤務なので、一人一人話を聞いてから処置をしてあげるとは難しい。身

体的に症状のある場合はいいが、心因的なのはつきりしない場合容易ではなく、この場合たくさん時間を要するのはいうまでもない。

この頃「保健室登校」という言葉を目にする。小・中・高校生までに見られる現象かと思いきや、大学においてもこの傾向にある学生が増えているのである。これは単純に小・中・高で「保健室登校」をしてきた世代が大学生になってきているせいなのかそれとも心身を害している学生が増えているせいなのか。そうすると医務室が暇であればあるほど喜んでいいのかもしれない。

変わりつつある入試トレンド

入試部長 山崎 一輝

入学試験制度は、どうやら大きく変わりつつある。かつては、偏差値の高い大学へ行くことが、受験生にとってもっとも好ましいことであるといわれていた。確かに、就職に有利であったり、人脈づくりに適している面があった。安定している社会では、りっぱに通用していたわけだ。しかし、いまや、単一の尺度では測り得ないほどの複雑な世界に、私たちは暮らしているということが、わかってきた。何よりも、自分にあっているということが、大切になってきた。自分をどこまで伸ばして行くかが、もっと大切になってきた。つまり、偏差値も重要だが、偏差値から自由な考え方も重要だということであって、良く考えてみれば、当たり前のことだった。

大学の方から見て、入試は変わって行くのだろうか。様々な点を指摘することができるが、ここでは、受験生の地理的な偏りについて触れてみたい。新潟産業大学では、開学以来、全国的な規模で広く受験生を集めてきた。留学生を含めれば、地球的な規模で広く

言い直したほうがいだろう。ところが、最近、県外の受験生の占める割合が低くなってきた。地元密着というメリットは、当然のことだが、ある意味では、少し残念なことである。大学とは、いろいろなところから、そして、いろいろな考え方の人々が、集まるところだからである。

実際のデータを掲げてみただけで、比較してほしい。なお、あわせて、男女比も記したので、参考にしてほしい。

男女比も女子の比率が少ない点を改善して行かなくてはならない。就職のところでも触れているように、本学の女子の就職内定率は、きわめて高く、学内外からの評価も高い。

データを見つめると、良い点も悪い点も気づくものである。知恵を出しあつて、悪い点を改善する実行プランに取り組みべきである。

本学のよさは何と言っても、アウトホームなどところであろう。丁寧な学生指導を通して、前向きな大学でありつづけたい。

本学入学試験 志願者・入学者の県内県外比率

年 度	学 部	志 願 者		入 学 者	
		県内	県外	県内	県外
昭和63年度	経 済	70%	30%	76%	24%
平成元年度	経 済	52%	48%	63%	37%
平成2年度	経 済	51%	49%	66%	34%
平成3年度	経 済	30%	70%	51%	49%
平成4年度	経 済	38%	62%	57%	43%
平成5年度	経 済	36%	64%	57%	43%
平成6年度	経 済	39%	61%	49%	51%
	人 文	49%	51%	41%	59%
平成7年度	(大学)	41%	59%	46%	54%
	経 済	44%	56%	57%	43%
平成8年度	人 文	41%	59%	37%	63%
	(大学)	43%	57%	51%	49%
平成9年度	経 済	48%	52%	58%	42%
	人 文	45%	55%	46%	54%
平成10年度	(大学)	47%	53%	54%	46%
	経 済	61%	39%	67%	33%
平成11年度	人 文	58%	42%	56%	44%
	(大学)	60%	40%	63%	37%
平成12年度	経 済	68%	32%	80%	20%
	人 文	53%	47%	48%	52%
平成13年度	(大学)	63%	37%	69%	31%
	経 済	74%	26%		
平成14年度	人 文	68%	32%		
	(大学)	72%	28%		

本学入学試験 志願者・入学者の男女比率

年 度	学 部	志 願 者		入 学 者	
		男子	女子	男子	女子
昭和63年度	経 済	94%	6%	93%	7%
平成元年度	経 済	96%	4%	93%	7%
平成2年度	経 済	96%	4%	88%	12%
平成3年度	経 済	95%	5%	86%	14%
平成4年度	経 済	92%	8%	87%	13%
平成5年度	経 済	93%	7%	84%	16%
平成6年度	経 済	93%	7%	86%	14%
	人 文	77%	23%	64%	36%
平成7年度	(大学)	90%	10%	79%	21%
	経 済	93%	7%	90%	10%
平成8年度	人 文	82%	18%	75%	25%
	(大学)	89%	11%	85%	15%
平成9年度	経 済	94%	6%	89%	11%
	人 文	80%	20%	76%	24%
平成10年度	(大学)	91%	9%	85%	15%
	経 済	92%	8%	87%	13%
平成11年度	人 文	73%	27%	70%	30%
	(大学)	88%	12%	81%	19%
平成12年度	経 済	90%	10%	89%	11%
	人 文	68%	32%	75%	25%
平成13年度	(大学)	86%	14%	84%	16%
	経 済	90%	10%		
平成14年度	人 文	77%	23%		
	(大学)	86%	14%		

(平成11年3月18日現在)

超氷河期を超え大就職難

平成十一年度は更に厳しい年に：就職課から

平成十年度の就職状況

「学生が内定を辞退してくれて助かった」。ある企業の人事担当者の偽らざるところを聞いた。当初は大卒五名を採用する計画で求人活動を始め、厳しい就職環境も考慮し、水増しはせずピタリ五名に内定通知を出した。しかし、その後の業績悪化から、新卒採用は二名がやっとという事態に立ち至った。普通なら内定辞退学生はいまいますかきり。ところが、今年は一待ってました」と胸をなでおろしたのだという。

大卒の就職環境は、平成九年度のミニバブルから一転、大不況、大就職難となった。大卒全体の求人倍率は、一・六八倍から一・二五倍に、文系に限れば超氷河期といわれた平成七年の〇・九一倍を下回る〇・九〇倍となった(リクルート・リサーチ社調査)。またこの調査は六月時点のもの。冒頭に記したような企業、採用計画を下方修正した企業が四分の一にものぼっており(十月二十一日付日経新聞)、景気の悪化が進むにつれ更に採用を手控えたことがうかがえる。このような状況から大学生の内定率は、十月一日現在で六七・五%

十二月一日現在でも八〇・三%にとどまっている(表②)。この結果は、文部省・労働省が共同調査を始めた平成六年以来最低だった平成七年を更に下回る最悪のもの。就職希望率の低下と合わせて見ると実態はもつと厳しい。地域別では、雇用力のある関東地区はまずまずだが地方は非常に厳しい(表③)。若干のパラッキはあるものの地方各県の求人状況は、前年の二割から三割減となった。

さて、本学の就職状況だが、三月十日現在、経済学部の内定率が九〇・二%、人文学部が八九・八%(表①)。新潟県内文系大学の中では最も良い成績であり、全国平均も上回っている。しかし、本学の前年同期と比較すると経済学部は六・二%、人文学部も四・六%の落ち込みで、第一期生が就職活動をした平成三年度以降最悪の結果となった。ただし、男子以上に厳しい環境下にある女子が、ほぼ一〇〇%内定という健闘を見せており、大就職難を勝ち残っていく可能性を示してくれた。

平成十年度分の求人票は、昨年の五月から六月にそのほとんどが出揃った。また、本学三二八名の

内定者(二月一日現在)のうち、六九%が夏休み前までに内定していた。就職協定廃止二年目となった大不況下の就職戦線は、やはり短期決戦で終わっていた。

平成十一年度の見通し

秋田魁三社(前年比一社減)、土毛新聞八四社(同三六社減)、信濃毎日四八社(同二四社減)、北日本新聞二〇社(同六四社減)、新潟日報五八社(同四三社減)等。

これは、地方新聞社が主催する「人事担当者と大学就職担当者」と

の情報交換会への参加企業数だ。例年秋から暮れに開かれ、次年度の採用・就職等について情報交換したり、相互にPRする会合。各地方で参加企業数が大幅に減少しており、平成十一年度は更に採用抑制傾向が強まるものと思われる。

こうした中、「企業は学生に何を求めるか」を目録ディスコ社が調査した。文系男子学生に対しては、一位がコミュニケーション能力、二位バイタリテイ、三位基礎学力。女子学生では一位が明るさ、

二位コミュニケーション能力、三位基礎学力となった。要は、相手の話をよく聞き自分の考えをきちんと話せ、少々のことにはへこたれず、基礎学力があり、当社志望の意志強く、明るい笑顔の学生。こんな学生を採用できれば人事は大満足というわけだ。人間だから欠ける所があるのは当たり前。しかし、何かひとつ自信を持ってアピールできる強みを身につけ、四月から五月にかけて山場を迎える採用試験にのぞんでほしい。

二位コミュニケーション能力、三位基礎学力となった。要は、相手の話をよく聞き自分の考えをきちんと話せ、少々のことにはへこたれず、基礎学力があり、当社志望の意志強く、明るい笑顔の学生。こんな学生を採用できれば人事は大満足というわけだ。人間だから欠ける所があるのは当たり前。しかし、何かひとつ自信を持ってアピールできる強みを身につけ、四月から五月にかけて山場を迎える採用試験にのぞんでほしい。

【表①】 本学就職内定状況 (平成11年3月10日現在)

		*1	合計	男子	女子
経済学部	両学部合計就職内定率	90.1%(▲5.8)		88.9%(▲7.7)	98.0%(▲5.0)
	就職内定率 *2	90.2%(▲6.2)		89.2%(▲7.5)	100.0%(▲5.4)
	上場企業内定率 *3	16.3%(▲1.7)		14.8%(▲1.4)	29.2%(▲0.2)
	就職希望率 *4	83.1%(▲6.3)		84.5%(▲3.8)	72.2%(▲25.2)
	就職内定者数	249人(▲20)		223人(▲11)	26人(▲9)
	就職希望者数	276人(▲3)		250人(▲8)	26人(▲11)
人文学部	卒業見込者数	332人(▲20)		296人(▲22)	36人(▲2)
	就職内定率 *2	89.8%(▲4.6)		87.7%(▲8.7)	95.7%(▲4.5)
	上場企業内定率 *3	13.9%(▲4.0)		9.6%(▲0.6)	25.0%(▲6.0)
	就職希望率 *4	75.9%(▲12.2)		73.0%(▲12.9)	85.2%(▲6.7)
	就職内定者数	79人(▲5)		57人(▲4)	22人(▲9)
	就職希望者数	88人(▲1)		65人(▲10)	23人(▲11)
留人学生	卒業見込者数	116人(▲15)		89人(▲25)	27人(▲10)
	就職内定率	6人		3人	3人
	大学院等進学者数	4人		3人	1人
	卒業見込者数	32人(▲12)		19人(▲2)	13人(▲10)

- *1: ()内は、前年同期比増減
- *2: 就職内定率=就職内定者数÷就職希望者数
- *3: 上場企業内定率=上場企業内定者数÷(全内定者数-公務員内定者数等)
- *4: 就職希望率=就職希望者数÷卒業見込者数

【表②】 全国との比較 (平成10年12月1日現在)

		合計	男子	女子
本学	就職内定率	82.9%(▲6.2)	81.9%(▲9.0)	88.9%(▲7.6)
	就職希望率	84.3%(▲4.0)	84.1%(▲2.2)	85.7%(▲11.7)
全国の大学	就職内定率	80.3%(▲4.5)	83.5%(▲4.1)	73.5%(▲5.3)
	就職希望率	72.0%(▲3.5)	69.9%(▲3.8)	77.1%(▲2.7)
	就職内定率	78.6%(▲6.9)	81.8%(▲6.7)	71.9%(▲7.3)
	就職希望率	83.1%(▲1.3)	82.6%(▲1.1)	84.2%(▲1.9)
私立	就職内定率	85.7%(▲2.9)	89.2%(▲4.1)	78.3%(▲1.0)
	就職希望率	50.4%(▲7.6)	46.6%(▲8.7)	60.8%(▲4.8)

- *: 文部省・労働省共同調査
- *: ()内は、前年同期比増減

【表③】 地域別内定状況 (平成10年12月1日現在)

地域	就職内定率	地域	就職内定率
北海道・東北	77.4%(▲2.2)	近畿	83.0%(▲3.2)
関東	87.7%(▲4.9)	中国・四国	68.1%(▲6.7)
中部	74.4%(▲7.3)	九州	63.8%(▲9.4)

- *: 文部省・労働省共同調査
- *: ()内は、前年同期比増減

名誉教授の称号 授与について

平成10年7月16日に本学元教授の川村克己先生、光益徹也先生、北岡茂男先生へ本学名誉教授の称号が授与されました。本学名誉教授規程に基づき選考され、平成10年7月8日開催の全学教授会で決定されました。

在職中、川村先生は副学長、附属図書館長を、光益先生は人文学部長、附属図書館長、学生部長を、北岡先生は留学生センター所長、国際交流委員長を歴任され、本学の発展に寄与されました。

父母の会

「大学と学生と家庭の結び付きを深め、大学の発展に寄与する」これが父母の会の目的です。幸い多数のご父母に御賛同いただき、入会率も8割に達する大きな組織を形成するに至りました。活動は多岐にわたっています。6月の総会においては、大学生活全般に関する詳細な説明を行うとともに、懇親会で教職員・会員との情報交換を行います。

11月の学園祭中には、会員や時代のニーズに対応した講師を招いて文化講演会を実施しています。

校友会(青涛会) 通信

校友会事務局長 石塚 延栄

ご案内のとおり、校友会の目的は、会員相互の親睦と母校の発展であります。私達一人ひとりが同窓意識を高め、会と母校の未来に知恵と力を発揮してほしいと願っております。近年、各支部、同期会等が活発に開催され、結束と前進を図っております。会では、これら活動を支援、資金援助してまいります。

- 事業内容
- 1、定期総会(三年毎)、次回平成十二年
- 2、校友会(青涛会)報の発行 (毎年)
- 3、会員名簿の発行 (十年毎)
- 4、同期会、グループ会、支部総会 (毎年または二年毎)
- 5、支部長、事務局長連絡協議会 (毎年)
- 6、本部役員会 (毎年)
- 7、支部役員会 (年一〜二回)
- 補助金の申請

会合を計画される責任者は次の書類を本部事務局宛に提出して下さい。

- 1、定期総会(二年毎)、次回平成十二年
- 2、校友会(青涛会)報の発行 (毎年)
- 3、会員名簿の発行 (十年毎)
- 4、同期会、グループ会、支部総会 (毎年または二年毎)
- 5、支部長、事務局長連絡協議会 (毎年)
- 6、本部役員会 (毎年)
- 7、支部役員会 (年一〜二回)

細な事でも結構です。皆様のお考えを事務局までお知らせ下さい。また、未入会の方は是非ご入会ください。

学生たちを取り巻く環境は、厳しさを増す一方です。だからこそ彼らには混迷と変革の時代を生き抜く力を身に付け、充実した4年間を過ごして欲しいと思います。そのためには、大学と父母相互の連絡協調が今まで以上に必要と感じる今日この頃です。

☆本部事務局に、月、火、木、金の各曜日、石塚が常動しています。ご利用の際はご連絡下さい。

十一月〜十六時まで。

編集後記

入試課 小林亮一

いま巷では、「だんご3兄弟」が大ブーム。デパートやスーパー、商店街と、この歌が流れていないところはない。子供はもとより大人にも人気で、CDは生産が間にあわず、社会現象にもなっている。まるでジングルベル1色となるクリスマスにヒットしているのか、諸所分析がなされている。広報担当の一員としては興味津々である。「意味に疲れた現代の大人のための童謡で、歌詞の意味が希薄なことがヒットの理由」、「ヒットしたときは、当事者でもわからないときがある」、「シンブルなものを求める傾向に乗れた」等々。しかし、これはといった答えは見当たらないようでもある。

我々は、多種多様な方向性を求め、それを持つようになった。しかし一方で、それを得たために、無くしてしまった大切なものも多かったのではないだろうか。そのなくしてしまった部分をこの歌はくすぐり、想い起こさせてくれているのかもしれない。まもなく21世紀を迎えようとしているが、重要なキーワードのひとつとして、「心」があげられるのではないだろうか。相手を大切に想い、心のこもった物を創りあげていきたいものである。

